大人気のNHK朝ドラ「あさが来た」のモデルとなった広岡浅子が注目され、明治以降に活躍した女性実業家たちが改めて見直されている。激動の時代に生き、商いを成功させた「女傑」にスポットを当て、子孫にその素顔を語ってもらった。

「あさが来た」のキャスト（上）と、大同生命などの礎をつくった女性実業家、広岡浅子（提供：大同生命保険）

「あさが来た」の広岡浅子だけじゃない！

明治の女傑たち

大阪の寄席から大芸能プロ「吉本興業」を築いた 吉本せい

明治22（1889）年生まれ。夫・吉本泰三と二人三脚で演芸興行を始め、漫才や芸人を育てる。興行主として活躍し、社長と会長を歴任。1950（昭和25）年没

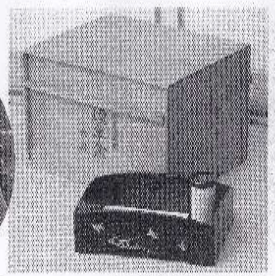
孫 吉本圭比子さん

私の祖父・吉本泰三はもともと大阪の荒物問屋の若旦那だったんですけれど、芸事が大好きで、芸人を連れて剣舞に興じて留守にしてばかり。折からの不景気もあって、明治44年頃に5代続いたお店を倒産させてしまいました。ちょうどその頃、天満天神裏の第二文芸館という演芸場の買収を勧められ、寄席を始めたのが吉本興業の初めです。

祖母のせいをモデルにした山崎豊子さんの小説『花のれん』では、このとき主人公が「あなたの好きな芸事なんだから、やってみたら」などと後押ししたことになっています。でも、せいは晩年、「わてはそんなこと言うてまへんで」と周囲にもらしていました。かつて芸人は河原乞食と呼ばれ蔑まれていましたから、「荒物屋さんに嫁いできたのに、何が悲しくて芸能をやらなあかんのや」という気持ちだったと思います。でも、妻は夫に従うのが当たり前の時代。仕方なく実家に資金援助を頼み、2人で演芸場を開業したのです。

大正2年に吉本興行部の看板を掲げた2人は、その後も演芸場を買収し続け、大勢の芸人を抱えるようになっていきました。泰三は、買収などの交渉に妻のせいを派遣していました。「女の色気を使うて、少しでも安くしてもろてこい」というのがその理由。若い頃のせいはべっぴんさんと評判でしたから、相当効果があったようです。

大正13年に泰三が急死してから、34歳のせいは実弟の林正之助を片腕に、さらなる事業の拡大を図ります。嫌々始めた演芸の仕事ですが、商才に秀でていたこともあり、何とか主人の遺志を継がないかんと思い、だんだんのめり込んでいったんでしょう。昭和7年に吉本興業合名会社に改組し、東京支社も設立。大芸能プロダクションの初代社長となって、昭和25年に他界するまで、府や国から数々の賞や勲章を受けました。また、政財界にも顔が広く、東郷平八郎さんや小林一三さんとは特に親しくしていました。



せいの夫・吉本泰三

せいが愛用した煙草盆

せいは、芸人の心をつかむのも上手でした。正之助が芸人を厳しく叱った後、せいが優しく声をかけ、「これで堪忍しとくなはれ」とお金を握らせる。この「飴と鞭」方式で、芸人たちは吉本から離れられなくなったといいます。正之助は、「あねさんばっかり良い役やってからに……」とぼやいていたそうですが（笑）。

女傑と言われる吉本せいですが、私にとっては優しいおばあちゃんでした。ときどき祖母の家に行くと、いつもお寿司をとってくれました。あるとき、お寿司を食べた後、「ご馳走様」とすぐ席を立った私に、祖母は「ちゃんと食器を台所に片付けていきなはれ」と言いました。優しいだけでなく、しつけには厳しい人だったんですね。そういう祖母だからこそ、大勢の芸人や従業員がついていったんだろうと思います。

鈴木商店記念館提供

大海祐希主演の「お家さん」で知られる大商社の女主人 鈴木よね

曽孫 鈴木一誠さん

太陽鉱工の前身は、大正8年創立の太陽曹達（株）、鈴木商店の子会社です。昭和2年の金融恐慌で鈴木商店が破綻したとき、関連企業約30社を処分し、残った証券をすべて太陽曹達に集約しました。つまり当社は、鈴木商店直系の後継企業なのです。

明治27年、当主の鈴木岩治郎が亡くなったとき、鈴木商店は解散の危機に直面します。「女が商売するなんて」という時代ですから、親戚たちは、解散するようよねに迫ったそうです。しかし、43歳のよねは弱冠28歳の従業員・金子直吉を大番頭に抜擢し、存続を決断。ここから直吉の商才が開花します。次々と新事業を展開し、小さな砂糖問屋を年商16億（当時日本のGDPの1割に相当）の巨大商社に成長させていくわけです。

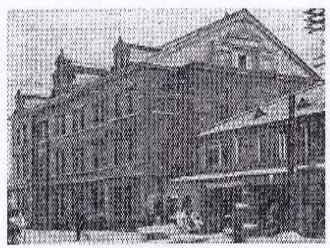
直吉は儲けが出るとすぐ新しい事業に注ぎ込み、多額の融資も受けていました。よねのすごいところは、そんな直吉のやり方に一切口出ししなかったこと。任せると決めたからには、信じて腹をくくっていたのでしょう。直吉も、「お家さん」と呼ばれたよねのことを信頼して、終生忠誠心を寄せていました。

私の父は大正7年生まれですが、生後間もなく「鈴木商店焼き討ち事件」に見舞われます。全国で米騒動が勃発するなか、「鈴木が米を買い占めている」という報道があり、本店が焼き討ちされたのです。これは完全に誤報だったのですが、急成長した新興企業に対する悪意が背景にあったのかもしれません。このとき、赤ん坊だった父を連れて、一家で宮島に逃げたと聞いています。

当時、鈴木商店は年商日本一の絶頂期を迎えていましたが、鈴木家の生活はまったく華美ではなかったそうです。よねが質素倹約を旨としていたからでしょう。その家風は今もわが家に引

すずき・かずのぶ　昭和21年生まれ。太陽鉱工株式会社社長。鈴木よねの三男・岩蔵を祖父にもつ

撮影　藤岡みきこ



神戸宇治川筋にあった鈴木商店本店（旧みかどホテル）。大正5～7年頃／鈴木商店記念館提供

よしもと・けいこ　吉本せいの三女・峰子を母にもつ。この椅子は東郷平八郎がせいに贈ったもの

撮影　藤岡みきこ